

地ひびき



321号

薫風の中で ―二つの絵画展―

丸岡 稔

4月27日から30日まで、盛岡市の今では古い文化財となっている盛岡市公会堂で、私の次兄の「白寿展」が開かれました。私の男兄弟4人は子どもの時から絵が好きでしたが、夫々仕事の関係で本格的に描くようになったのは、長兄が「そろそろ兄弟展をやってみなにか」と言い出してからでした。会社を持っていて多忙なため、最も寡作な次兄に発破をかけるのが秘かな目的で、「第1回展は盛岡でやる」という長兄の鶴の一声で実現し、その後は順不同ながら、兄弟展はそれぞれの土地で2年毎に開催され12回にも及びました。長兄が亡くなり、数年前に私のすぐ上の兄も亡くなりましたが、4人揃っていた時から、春の大型連休に、私の住む長岡市に集合して実施していたスケッチ旅行は、次兄と2人になってからも続けて来ました。何度も個展を開いては？とすすめられていながら腰を上げなかった兄に、長男が「親父は何もしなくていい、おれたちが全部段どりするから」と白寿を迎えた今年、最初の個展が決まったのでした。「人様に見てもらえるような絵でない」と不安がっていました。いざ開幕してみますと、歴史ある公会堂の壁面と、99年の年輪を感じさせる作品群が実によく調和して、私が予想したより遙かに良い展覧会になりました。兄の若い頃の絵はパステル調の明る

い色調で、私の憧れであったのですが、年とってからだんだん暗くなり、私なんかつい「パレットから暗い絵の具を追放して！」なんて本気で言ったこともありました。しかし今回、数多くの作品をまとめて観て、そこに長い人生がその色調から感じられ、それなりの必然性があったことに気付き、生意気なことを言った自分を反省しました。

全て長男がお膳立てをしてくれただけとは言え、自分なりに作品の準備も大変だったと思いますし、会期中大ぜいの方が観に来て下さり、そのために時間中ずっと会場に詰めていたので疲れも溜ったと思うのですが、いささかも顔に出さず、元気にしていました。流石に終わってすぐに長岡にというわけには行かず、5月3日、濁川君が私を連れて兄を迎えに行ってくれました。翌朝5時盛岡を出発。村山市で最上川を描き、夕方にすでに予約していた飯豊の白川湖畔の宿に到着。翌日は宿の裏庭から飯豊連峰を描いた後長岡着。更にメンバーが顔馴染になっている長岡デッサン会で人物を描いたり、安曇野でアルプス連峰、伊那で木曾駒を描くという強行軍にも、これが100才を目前にした人間かと、何か打ち込むものを持つと、身体が精神について行くものだと改めて感じさせられました。

長岡に滞在中に、私が実行委員長として開催した一つの展覧会を兄に観せることが出来ました。15年前に97才で亡くなるまで医師として現役を貫き、趣味の絵や文学、音楽等についても、その打ち込み方が半端でなかった江部恒夫先生の遺作展でした。以前地ひびきで何度も書かせて頂いた、医師で画家の丸山正三先生は末弟に当り

ます。正三先生に勉強と共に絵の手ほどきをしたのは実はこの兄さんだったのです。早くからその才能を高く評価していた愛する弟に宛てた手紙を見せてもらったことがあります。その中でプロにありがちな俗に墮することを戒めた言葉に感動しました。そしてそれは江部先生ご自身への戒めでもあったのです。幸いに私はこのお二人と同時代に生き、長い間親しくつき合わせて頂きましたが、共に長寿を生きたお二人の情熱と感性は最期までいささかも衰えることはありませんでしたし、その兄弟愛にも常に心打たれたものでした。江部先生のごことは地ひびきに書かせてもらったことがあります。当時まだお元気だった佐藤州男さんからお手紙を頂いたことを憶えています。展覧会場には、戦時中従軍していた中国からの奥さん宛の沢山の手紙も展示されていました。その中で「このままでは、言われている一億総玉砕も避けられないんだらう。もう帰国は出来ないかもしれない。その覚悟は出来ている。私のレコードのコレクションや本や着ていたものは全て子ども達の為に役立たせて欲しい」と書いてありました。やがて日本は敗戦し江部先生は無事、奥さんや子どもさんに再会できました。そして今、こうして珠玉の如き作品を見せてもらうことが出来、私など沢山のことを学ばせて頂いたのです。同じように赤紙一本で召集され、中国で長く苦勞して来た兄は、飾られた絵に感動すると共に、この手紙に殊の外、心を揺さぶられるものがあつたようでした。江部先生よりすでに2年長く生きています兄は、5月15日、薫風の中を元気で盛岡に帰って行きました。